

一次の文章を読み、古典の作品名を答えなさい。(10点×5問)

- (1) 今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

竹取物語

点

- (2) 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

平家物語

- (3) 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

枕草子

- (4) つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

徒然草

- (5) 月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとなす。古人も多く旅に死せるあり。

おくのほそ道

二次の古典作品の作者名を下から選び、線でつなぎなさい。(10点×5問)

- (1) 枕草子 松尾芭蕉  
(2) 徒然草 兼好法師  
(3) おくのほそ道 紫式部  
(4) 方丈記 清少納言  
(5) 源氏物語 鴨長明



できるだけ漢字で書けるようにしましょう!

歴史的仮名遣いのパターン (10点×10問)

① ぢ ↓ じ

② づ ↓ ず

③ む ↓ ん

④ ゐ ↓ い

⑤ ゑ ↓ え

⑥ を ↓ お

⑦ くわ ↓ か

⑧ 「ア段の音+う (ふ) ↓ 「オ段+う」

さふ ↓ そ  
う

⑨ 「イ段の音+う (ふ) ↓ 「イ段+ゆう」

きう ↓ き  
ゆ  
う

⑩ 「エ段の音+う (ふ) ↓ 「イ段+よう」

てふてふ ↓ ち  
よ  
う  
ち  
よ  
う

ハ行の仮名は、言葉の頭にあるもの以外、ワ行に変わることも覚えておこう！  
(例 あはれ → あわれ)



点

一次のー線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

(1) 今は昔、竹取の翁と①いふものありけり。

① いうもの



点

野山にまじりて竹を取りつつ、②よろづのこと③使ひけり。

② よろず

③ つかいけり

名をば、さぬきのみやつこと④なむいひける。

④ なんいける

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと⑤うつくしうてゐたり。

⑤ うつくしうてゐたり

(2) 春はあけぼの。⑥やうやう白くなりゆく⑦山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

⑥ ようよう

⑦ やまぎわ

夏は夜。月のころはさらなり、闇も⑧なほ、蛍の多く飛びちがひたる。

⑧ なお

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと⑨近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、⑩飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

⑨ ちこうなりたるに

⑩ とびいそぐさえあわれなり

一次の―線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、①をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ②揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。

陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、

「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、③願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二度面を④向かふべからず。いま一度本国へ⑤迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせ⑥たまふな。」

と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなつたりける。

与一、かぶらを取つてつがひ、よつびいて⑦ひやうど放つ。小兵と⑧いふぢやう、十二束三伏、弓は強し、浦響くほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、

⑨ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。

あまりのおもしろさに、感に堪へざるにやとおぼしくて、舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒革をどしの鎧着て、白柄の長刀持つたるが、扇立てたりける所に立つて舞ひしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませ寄つて、

「御定ぞ、つかまつれ。」  
 と言ひければ、今度は中差取つてうちくはせ、よつびいて、しや頸の骨を⑩ひやうふつと射て、舟底へ逆さまに射倒す。平家の方には音もせず、源氏の方にはまたえびらをたたいてどよめきけり。

(「平家物語」による)

① おりふし  
 ③ ねがわくは  
 ⑤ むかえん  
 ⑦ ひようど  
 ⑨ ひいふつと

② ゆりすえ  
 ④ むこう  
 ⑥ たもうな  
 ⑧ いうじよう  
 ⑩ ひようふつと



一次のー線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

これも仁和寺の法師、童の法師に①ならむとする名残とて、各遊ぶことありけるに、②酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、③つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。

しばし奏でて後、④抜かむとするに、大かた抜かれず。酒宴ことさめて、⑤いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首の⑥まはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべき様なくて、三足なる角の上に、帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師(くすし)の許、率(い)て行きけるに、道すがら人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許(もと)にさし入りて、むかひ⑦居たりけむ有様、さこそ異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝる事は書にも見えず、傳へたる教へもなし」といへば、また仁和寺へ帰りて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。

かゝる程に、或者の⑧いふやう、「⑨たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらむ、たゞ力をたてて引き給へ」とて、藁の蒂(しべ)をまはりにさし入れて、金を隔てて、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺(か)けうげながら、抜けにけり。からき命⑩まうけて、久しく病み居たりけり。

(「徒然草」による)

⑨	⑦	⑤	③	①
たとい	いたりけん	いかがはせん	つまるように	ならん
⑩	⑧	⑥	④	②
もうけて	いうよう	まわり	ぬかん	よいて

見たことがない文章でも、歴史的仮名遣いの読み方は一緒だよ。  
 大まかな内容を捉えられるようにしよう!



一次の1線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。(10点×10問)

点

おのれ古典(イニシヘブミ)をとくに、師の説と①たがへること多く、師の説のわるき事あるをば、わきまへいふことも②おほかるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これ③すなはちわが師の心にて、つねに④をしへられしは、後によき考への出来たらんには、かならずしも師

の説にたがふとて、なほゞかりそとなむ、教へられし、こはいと⑤たふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つ也、大かた古へを⑥かむかふる事、さらにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず、又よき人の説ならんからに、多くの中には、誤りもなかなからむ、必わるきこともまじらではえあらず、そのおのが心には、今はいにしへのこゝろことごとく明らか也、これをおきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかむかへもいでくるわざ也、あまたの手を経(フ)るまにまに、さきざきの考へのうへを、なほよく考へ⑦きはむるからに、つぎつぎにくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず、よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、⑧いふかひなきわざ也、又おのが師などのわるきことを⑨いひあらはすは、いとまかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきをしるごなし、師の説なりとして、わるきをしりながら、いはずつゝみかくして、よさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ⑩たふとみて、道をば思はざる也、宣長は、道を尊み古へを思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古への意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへり見ざることあるを、猶わろしと、そしらむ人はそしりてよ、そはせんかたなし、われは人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古への意をまげて、さてあるわざはえせずなん、これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや、そはいかにもあれ

(本居宣長「玉勝間」より師の説になづまざる事による)

① たがえる  
③ すなわち  
⑤ とうときおしえ  
⑦ きわむる  
⑨ いいあらわす

② おおかる  
④ おしえられし  
⑥ かんこうる  
⑧ いうかいなき  
⑩ とうとみて



漢文の訓読①

□訓読とは

- ・漢字のみで書かれた原文に送り仮名を補ったり、返り点や句読点を付けたりして、日本語の文章として読めるようにすること。
- ・訓読のために付けるさまざまな符号を**訓点**という。

□訓点の位置

←送り仮名

読ム

書ヲ

→返り点



点

① レ点…一つ下の字を読んだから、返って読む。

(20点×2問)

例  
 2  
 1

(1) 1 3 2 (2) 3 2 1

② 一・二点…二つ以上離れた下の字を読んだから、返って読む。

(20点×2問)

例  
 3 1 2 1

(1) 1 4 2 3

(2) 6 2 1 5 3 4

③ 上・下点…一・二点と合わせて使い、二つ以上離れた字を読んだから、返って読む。

(20点×1問)

例  
 5 3 1 2 4

(1) 6 4 2 1 3 5

一 訓点にしたがって、四角に読む順番を数字で書き入れなさい。(10点×10問)

点

	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(1)
	7	2	6	5	1	6	4	5	2
	ニ	レ	三	二	下	二	三		レ
	5	1	1	3	4	3	2	1	1
				レ	二	二	レ		
	6	10	5	2	2	1	1	4	3
	一	下	二	レ				二	レ
	9	3	2	1	3	2	3	2	2
	上				一	一	一		
		8	4	4	6	4	5	3	
		三	レ	一	レ			一	
		4	3	6	5	5			
						上			

- (2) 3
- レ 2
- レ 1

「レ」は、「一・二点」と  
「レ点」が合わさったも  
のだよ



漢文の訓読②

書き下し文

訓点にしたがって、語順を並びかえ、漢字とひらがなで書いた文章のこと。

特別な読み方をする字

- ① 「不レ」…書き下し文では「レず」「レざる」と書く。
- ② 「非ズ」…書き下し文では「あらズ」と書く。
- ③ 「可シ」…書き下し文では「べシ」と書く。
- ④ 「於」「干」「而」…置き字。書き下し文には書かない。

一次の訓読文を書き下し文に直さない。(20点×5問)

(1) 読レム 書ラフ

書を読む

(2) 有レバ 備ヘ 無レシ 憂ヒ

備へ有れば憂ひ無し

(3) 歳ハ 月ハ 不レ 待レタ 人ヲ

歳月は人を待たず

(4) 良ハ 薬ハ 苦シ 於ニ 口ニ

良薬は口に苦し

(5) 不レンバ 入ニラ 虎ノ 穴ニ 不レ 得ニ 虎ノ 子ヲ

虎穴に入らざれば虎子を得ず



特別な読みをする字は、他にも  
・「勿カレ」(なカレ)  
・「不能ハ」(あたはず)  
などがあるよ。特に「不」をひらが  
なで書くことはよく覚えておこ  
う!

点

一 書き下し文を参考にして白文に訓点を書き入れなさい。(10点×10問)

(1) 暮に河陽の橋に上る。

暮<sup>ニ</sup>上<sup>ル</sup>河陽<sup>ノ</sup>橋<sup>ニ</sup>。

(2) 李下に冠を正さず。

李<sup>下</sup>に冠<sup>ヲ</sup>を正<sup>ス</sup>。

(3) 百聞は一見に如かず。

百<sup>聞</sup>は<sup>一</sup>見<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>ず。

(4) 徳は孤ならず。必ず隣有り。

徳<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>孤<sup>ナラ</sup>ず。

(5) 西のかた諸侯を得んとして錦水に棹さす

西<sup>ノ</sup>か<sup>タ</sup>諸<sup>シ</sup>侯<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>ん<sup>ト</sup>して<sup>ニ</sup>錦<sup>ノ</sup>水<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>棹<sup>ス</sup>。

(6) 雲には衣裳を想い 花には容を想う

雲<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>衣<sup>ヲ</sup>裳<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>想<sup>フ</sup>。

(7) 過ちて改めざる、是を過ちと謂う。

過<sup>チ</sup>て<sup>レ</sup>改<sup>メ</sup>ず<sup>ル</sup>、<sup>レ</sup>是<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>過<sup>チ</sup>と<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>。

(8) 故に事の格に合わざる者を言いて杜撰と為す。

故<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>事<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>格<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>合<sup>ワ</sup>ず<sup>ル</sup>者<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>い<sup>テ</sup>杜<sup>撰</sup>と<sup>ス</sup>。

(9) 青は之を藍より取りて、藍よりも青く。

青<sup>ハ</sup>は<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>藍<sup>ヨリ</sup>より<sup>ニ</sup>取<sup>リ</sup>て、<sup>レ</sup>藍<sup>ヨリ</sup>より<sup>ニ</sup>青<sup>ク</sup>。

(10) 故きを温めて新しきを知れば、以て師為る可し。

故<sup>キ</sup>を<sup>レ</sup>温<sup>メ</sup>て<sup>レ</sup>新<sup>シ</sup>き<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>ば、<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>師<sup>ト</sup>為<sup>ル</sup>可<sup>シ</sup>。

点



「矣」も置き字だから、書き下し文には含まれないよ。書き下し文をよく見て、漢字の使われている順番を参考にしよう！